

乳幼児との接触経験と接触時感情が 子どもへの関心に及ぼす影響

扇 原 貴 志*

問 題

Lorenz (1943) は、ヒトには子どもを目にすると、その身体的特徴（幼児図式；baby schema；*Kindchenschema*）に反応し、注意が引き寄せられ、魅力を感じ、子どもへの関心が生じる生得的なメカニズム（生得的解発機構）が存在するとした。この現象には文化差はなく（McArthur & Berry, 1987）、いくつかの実験的研究により、この現象が実際に生じることが証明されている（例えば、Brosch, Sander, & Scherer, 2007；Fullard & Reiling, 1976）。

これまで、大人が抱く子どもへの関心や好意的な感情、養護性や親準備性といった子どもへの態度の要因は、過去の乳幼児との接触経験にあるとされてきた。すなわち、接触経験を多く持った者ほど、肯定的な子どもへの態度を持つようになるとされてきた（安積, 2007；花沢, 1992；小嶋, 1989；中西・牧野, 1989；扇原・村井, 2012）。

しかし、子どもへの態度の要因を接触経験のみとするのには限界がある。乳幼児との接触時に抱いた感情もまた、乳幼児への接近行動や態度に影響を与えると推測できるためである。接触時にポジティブな感情を抱けば、その後も乳幼児とふれあおうとする動機づけがなされ、子どもへの態度も肯定的になることが予想される。一方、ネガティブな感情を抱けば、接触到回避的となり、否定的な子どもへの態度が形成されやすくなると予想される。乳幼児との接触時に抱いた感情により、その後の接触経験や子どもへの態度の程度に個人差が生じるとす

れば、従来の研究において指摘されてきた接触経験と子どもへの態度の関連は、接触時の感情が第3の変数として機能したことによる疑似相関である可能性が考えられる。

実際に、接触時の感情が子どもへの態度に及ぼす影響を指摘した研究はいくつか存在する。以下では、そうした先行研究について3点取り上げる。

岡田 (2010) は、保育系の学生における入学から卒業までの子どもへのイメージと親和感情の変化について尺度を用いて検討した。その結果、保育所・幼稚園実習後には子どもへのイメージや親和感情は有意に肯定的になるが、小児病棟・発達障害児施設での実習後にはそれらは有意に低下することを明らかにした。この理由を岡田 (2010) は、保育所や幼稚園実習で接した元気で活発な幼児と異なり、小児病棟で闘病している子どもや発達障害のためコミュニケーションが取りにくい子どもの姿を目にしたことで困惑や不安を感じ、それが得点に影響したためではないかと推測した。

伊藤 (2004) は、中学・高校生が乳幼児とのふれあう保育体験学習の効果について検討した。学習後の生徒に面接調査を行った結果、子どもへの興味が高まった生徒は、学習を振り返った際に学習への満足感や子どもへの共感が多く語ることが示された。

中嶋・砂上・日景・盛 (2004) は、高校生が保育体験学習後に書いた感想文を分析した。学習前後の乳幼児への好意度と感想文の記述の関連を検討した結果、学習中に抱いた感情や意識、考えが学習後の乳幼児への好意度に影響を及ぼすことを示した。

* おうぎはら たかし 東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科

キーワード：乳幼児との接触経験／乳幼児との接触時感情／子どもへの関心／大学生／質問紙法

こうした先行研究の結果は、接触時感情が子どもへの態度に影響することを示唆している。しかし従来、接触時感情やその影響については、面接や感想文分析などの質的な研究手法で検討されるのみであり、尺度を用いた量的な手法により検討した研究は見られない。また、1事例のみの保育体験学習を検討した研究がほとんどであり、一般化可能性に難がある。定量的な検討を加えることで、より一般化可能な結果を得られるであろう。

以上のような問題を踏まえ、扇原・首藤(2016)はまず、接触経験と接触時感情について尺度による測定を可能にするため、大学生を対象に小学校期、中学校期、高校期のうち、最も接触経験が多かった時期(最多接触時期)における接触経験の頻度を測定する尺度(乳幼児との接触経験尺度)と、接触時の感情の程度を測定する尺度(乳幼児との接触時感情尺度)を作成した。

乳幼児との接触経験尺度は以下の3下位尺度36項目からなる。第1は「遊びの共有」で、乳幼児と共に遊んだり、相互作用を持ったりした経験である(「一緒に遊んだこと」、「おしゃべりをしたこと」など20項目)。第2は「世話」で、乳幼児の世話や養育経験である(「おむつを替えたこと」、「ミルクを飲ませたこと」など9項目)。第3は「間接接触」で、乳幼児の言動や様子を見聞きしたり、学習したりした経験である(「街中で乳幼児の行動を意識して見ていたこと」、「乳幼児の成長や発達について学んだこと」など7項目)。

乳幼児との接触時感情尺度は以下の3下位尺度30項目からなる。第1は「快感情」で、接触時の喜びや楽しさなどの程度である(「うれしかった」、「楽しかった」など12項目)。第2は「当惑感情」で、接触時の戸惑いや困惑、緊張の程度である(「戸惑った」、「難しかった」など11項目)。第3は「不快感情」で、接触時の怒りや落胆などの感情の程度である(「いらだった」、「いやだった」など7項目)。

扇原・首藤(2016)では、接触経験と接触時感情には正の相関があることは分かっているが、子どもへの態度との関連については未検討であり、今後の課題とされている。これらの関連を検討することで、接触時感情が子どもへの態度に及ぼす影響や、接触経験と接触時感情ではどちらの方が子どもへの態度に強く影響しているかといった点について明らかにできるであろう。

また従来、接触経験については接触する時期も子どもへの態度の要因であると指摘されている。花沢(1992)は、大学生を対象に小学校期、中学校期、高校期の接触経験の程度を尺度により測定し、対児感情との関連を検討した。その結果、小学校期から高校期にかけて一貫して接触経験を多く持った者は、好意的な対児感情が強いことを明らかにした。

平成20年度の学習指導要領の改定により、中学校家庭科では乳幼児とのふれあい体験学習が原則必修化され、高校家庭科では学校ごとの選択項目となった(文部科学省, 2008, 2009)。従って、乳幼児と接触時期と頻度および接触時感情が、時間をおいた青年期後期における子どもへの態度にどのような影響を及ぼしているのかを検討することは、ふれあい体験学習が持つ教育効果の可能性を検討するという面から見ても意義がある。

そこで本研究では、大学生を対象に過去の乳幼児との接触経験と接触時感情が子どもへの態度に及ぼす影響について検討する。子どもへの態度としては、子どもへの関心の程度を指標として用いる。これはLorenz(1943)が示したように、子どもへの関心はヒトが子どもを目にした際に生じる生得的で原初的な意識であることに基づく。加えて、子どもへの態度の1つである養護性を提唱した小嶋(1989)が、子育てへの構えや自信が出現する前段階として、子どもへの関心が先行して出現するという理論を提唱し、子どもへの態度の発達において子どもへの関心が果たす役割の重要性を指摘しているためである。

子どもへの関心の程度を測定する尺度には、扇原・村井(2012)の子どもへの関心尺度がある。これは、大学生を対象に作成された3歳から6歳の幼児への関心の程度を測定する尺度で、以下の4下位尺度30項目からなる。第1は「好意的注目」で、幼児を目にした際に注目する程度である(「幼児の姿を見かけるとつい目で追ってしまう」、「幼児を見ているだけで楽しくなる」など14項目)。第2は「同情」で、不安そうにしている、悲しんでいる幼児への関心の程度である(「幼児が泣いていると何とかしてあげたいと思う」、「病院などで体調の悪そうな幼児がいると、とても心配になる」など7項目)。第3は「好奇心」で、幼児の会話や生活などへの関心の程度である(「幼児同士が会話をしていると、そ

乳幼児との接触経験と接触時感情が子どもへの関心に及ぼす影響

の内容が気になる]、「親に怒られている幼児がいると、なぜ怒られているのか知りたくなる」など6項目)。第4は「寛容性」で、幼児の泣き声や大声への寛容さである(「幼児の泣き声を聞くとイライラする(逆転項目)」、「遊んでいる幼児の歓声をうるさいと感じる(逆転項目)」など3項目)。

扇原・村井(2012)は、子どもへの関心と接触経験には正の相関があるとしている。従って、本研究においても同様に乳幼児との接触経験と正の影響が見られることが予想されるほか、接触時感情との間にも何らかの関連が見られる可能性がある。

また、本研究で大学生を対象とする理由は、小嶋(2001)が青年期は子どもへの関心が出現しやすくなる時期であるとしているためであり、子どもや子育てに関する問題がより身近な事柄として認識され始める時期と考えられるためである。青年期のうち、特に大学生という時期は、先輩や後輩、同級生などの身近な人々に子どもが誕生し、親となる者が現れ始める時期である。また、厚生労働省(2015)によれば、2014年の第1子出生時の平均年齢は男性32.6歳、女性30.6歳である。このことから考えて、平均的に見れば、大学卒業後10年以内に子どもをもつことになり、子育て役割を担う時期が中学・高校生より近い。子どもをもたないとしても、

大学卒業後は、就職して子育て世代を含む多様な世代の人々と交流するようになり、子育てが人生の一部として認識されやすくなる。すなわち、大学生という時期は、子どもや子育ての問題について現実的なものとして認識され、自らも子育て役割を担うことを自覚し始める時期であるといえる。加えて、以前の接触経験と接触時感情が過去の出来事として整理され、ある程度、客観的に内省できる時期であると考えられる。従って、大学生という時期は、過去の接触経験と接触時感情が子どもへの態度に及ぼす影響を検討するのに適した時期であるといえる。

以上より本研究では、大学生を対象に過去の乳幼児との接触経験と接触時感情が現在の子どもへの関心に及ぼす影響を検討する。その際に想定される因果モデルはFigure 1に示す3通りが考えられる。

モデル1は、接触経験が接触時感情に、接触時感情が子どもへの関心に影響を及ぼすという因果関係が直線的に連鎖することを想定したモデルである。モデル2は、接触経験が接触時感情とともに子どもへの関心にも影響を及ぼし、接触時感情は接触経験の媒介変数として子どもへの関心に影響を及ぼすというモデルである。モデル3は、接触経験と接触時感情の間に因果関係は想定せず、両者とも子どもへの関心に影響を及ぼすことを想定した

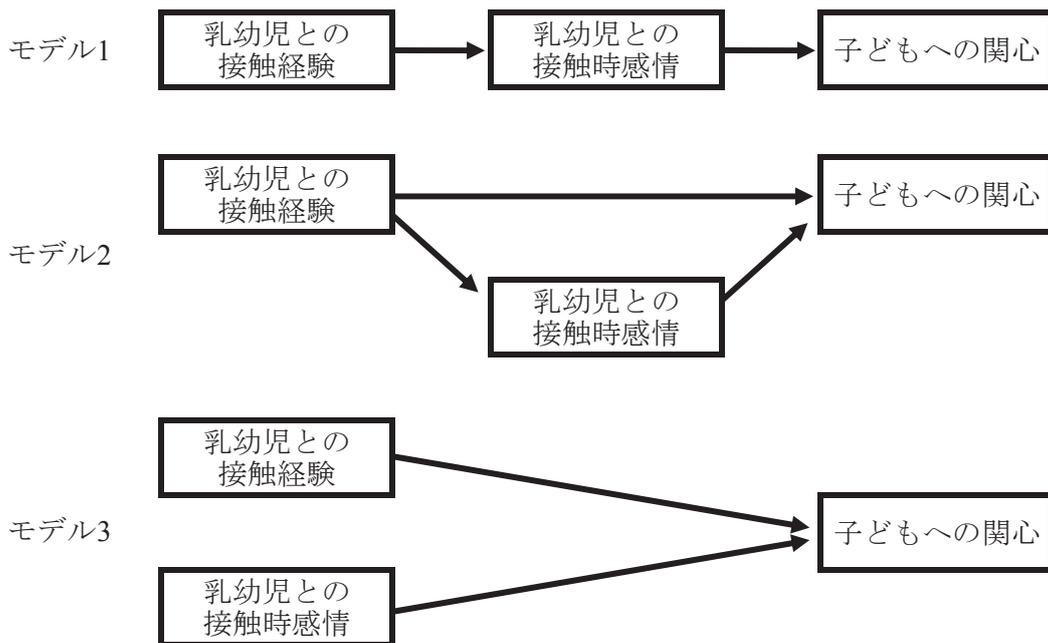


Figure 1 想定できる3つの因果モデル

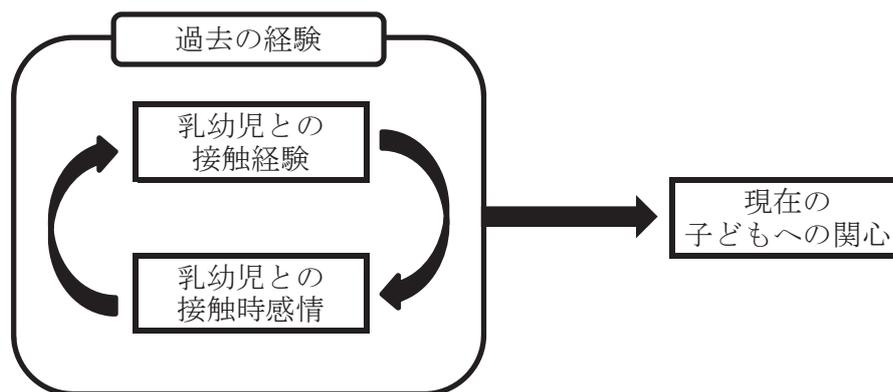


Figure 2 過去の乳幼児との接触経験と接触時感情が現在の子どもへの関心に及ぼす影響のモデル

モデルである。これら3つのモデルのうち、どれを採用するかという点においては、本研究における過去の接触経験と接触時感情を検討するという特質に注目する必要がある。

ふれあい体験学習のような1時点での接触経験とその際の感情が、子どもへの態度を変容させ得るか検討するような場合においては、モデル1かモデル2が適当である。しかし、本研究は過去の接触経験と接触時感情の影響を検討する。つまり、過去の接触経験が1回のみであった場合を除けば、複数の時点での接触経験と接触時感情が及ぼす影響について検討することになる。接触経験を持ち、感情を抱き、再び接触経験を持ち、感情を抱くというサイクルを複数回繰り返した後、子どもへの関心の程度が規定されていくと推測される。そのように考えると、接触経験と接触時感情のいずれかに時間的な先行性を想定することは難しく、両者間に因果関係を想定するのは困難である。この関係性を図として表したものがFigure 2である。

以上の推論を踏まえると、本研究のような過去の接触経験と接触時感情が及ぼす影響を検討する場合は、両者が同時に現在の子どもへの関心に影響を与えるというモデル3が妥当である。従って本研究では、モデル3に基づいて検討する。

方法

調査対象

社会科学（心理学，経営学，経済学等），自然科学

（理学，工学，化学，数学等），教育学，教養学等を専攻する大学生372名に質問紙調査を実施した。このうち、26歳以上の者，回答内容に不備がある者の22名を除いた355名（男性139名，女性215名，無回答1名；平均年齢19.93歳， $SD = 1.25$ ）を分析対象とした。

質問紙

乳幼児との接触経験尺度 扇原・首藤（2016）の乳幼児との接触経験尺度36項目を4件法（1.「全くなかった」，2.「まれにあった（年に数回程度）」，3.「しばしばあった（月に数回程度）」，4.「よくあった（月に数回以上）」）で尋ねた。なお，尺度への回答前に，接触経験が最も多かった時期（最多接触時期）を「小学校期」「中学校期」「高校期」「いずれの時期も全くなかった」から選択し，その時期における経験の頻度を回答するよう求めた。「いずれの時期も全くなかった」を選択した者は，本尺度と乳幼児との接触時感情尺度への回答は免除された。

乳幼児との接触時感情尺度 扇原・首藤（2016）の乳幼児との接触時感情尺度30項目を4件法（1.「全く感じなかった」，2.「あまり感じなかった」，3.「やや感じた」，4.「とても感じた」）で尋ねた。評定に際しては，上記の最多接触時期における接触時感情について想起し，回答するよう求めた。

子どもへの関心尺度 扇原・村井（2012）の子どもへの関心尺度30項目を6件法（1.「全くあてはまらない」，2.「あてはまらない」，3.「あまりあてはまらない」，4.「ややあてはまる」，5.「あてはまる」，6.「とてもあてはまる」）で尋ねた。

乳幼児との接触経験と接触時感情が子どもへの関心に及ぼす影響

Table 1 各下位尺度の信頼性係数と全体・最多接触時期別に見た平均得点および分散分析結果

	α	全体			小学校期 n=168	中学校期 n=72	高校期 n=54	接触なし n=58	$F(df)$	η^2	多重比較 (Tukey法)			
乳幼児との接触経験														
遊びの共有	.97	48.51	(16.94)	54.19	(16.76)	40.55	(12.77)	42.12	(15.96)	—	—	$F(2,274)=23.12$ ***	.15	小>中・高*
世話	.93	13.91	(6.52)	15.24	(7.09)	12.01	(5.07)	12.43	(5.61)	—	—	$F(2,287)=8.13$ ***	.05	小>中・高*
間接触	.81	11.33	(4.21)	10.95	(4.07)	11.39	(3.85)	12.48	(4.99)	—	—	$F(2,285)=2.70$.02	
乳幼児との接触時感情														
快感情	.93	37.12	(7.75)	37.59	(8.09)	36.52	(7.10)	36.61	(7.55)	—	—	$F(2,287)=0.62$.01	
当惑感情	.89	24.43	(6.77)	23.73	(6.31)	25.96	(6.89)	24.58	(7.73)	—	—	$F(2,288)=2.75$.02	
不快感情	.85	10.00	(3.21)	10.43	(3.47)	9.74	(2.78)	9.13	(2.66)	—	—	$F(2,289)=3.82$ *	.03	小>中・高*
子どもへの関心														
好意的注目	.96	63.71	(15.71)	68.24	(14.28)	62.63	(15.15)	62.83	(14.85)	52.79	(16.14)	$F(3,342)=15.42$ ***	.12	小>中*, 小・中・高>なし*
同情	.89	30.51	(6.61)	31.98	(6.17)	29.90	(6.50)	30.20	(6.48)	27.71	(6.78)	$F(3,347)=6.90$ ***	.06	小>なし*
好奇心	.87	22.23	(7.15)	23.95	(6.93)	20.57	(7.12)	22.48	(7.32)	19.34	(6.36)	$F(3,348)=8.18$ ***	.07	小>中・なし*
寛容性	.87	13.24	(3.30)	13.75	(3.08)	13.39	(3.44)	13.30	(3.01)	11.48	(3.51)	$F(3,347)=7.19$ ***	.06	小・中・高>なし*

注) 平均値の右のカッコ内は標準偏差。

* $p<.05$, *** $p<.001$

結果と考察

まず、各尺度の信頼性係数 (Cronbachの α 係数) を算出したところ、 $\alpha = .81 \sim .97$ と高い内的整合性が示された (Table 1)。そこで、項目得点が高いほど、その尺度が表す態度や経験の程度が高くなるように得点化 (逆転項目は逆の得点となるように処理) し、合計得点をもって各下位尺度得点とした。

各下位尺度の平均得点

各下位尺度の平均得点について、全体と最多接触時期別に算出した (Table 1)。最多接触時期による得点差を検討するため、1要因分散分析を行った。その結果、接触経験と接触時感情では、遊びの共有、世話、不快感情で有意な主効果が見られた。多重比較 (Tukey法) の結果、小学校期が最多接触時期であった者は、他の時期が最多接触時期であった者よりそれらの得点が高かった。

小学校期においては、主とした接触対象になると考えられる弟妹や親戚、近所の子どもなどの乳幼児と年齢が近い分、そうした子どもと一緒に遊んだり、世話をしたりする機会が多いと推測される。そのため、小学校期が最多接触時期であった者は中学、高校期が最多接触時期であった者より、遊びの共有や世話経験が多かったであろう。また小学校期では、乳幼児との遊びなどの相互作用場面において、年齢の近さゆえに、いざこざなどの不協和が生じやすいと推測される。そのため、中学、高校期が最多接触時期であった者より多くの不快感情を経験したのであろう。

子どもへの関心尺度においては、分散分析の結果、全

下位尺度で有意な主効果が見られた。多重比較 (Tukey法) の結果、主に小学校期から高校期のいずれの時期においても乳幼児との接触経験が一切なかった者は得点が低かった。花沢 (1992) は、小学校期から高校期にかけて接触経験を多く持った者は、大学生時点での子どもへの態度が肯定的であることを明らかにしている。本研究でも、時期にかかわらず接触経験が1回でもあった者の方が、接触経験が一切なかった者より子どもへの関心が高かった。この結果は、先行研究を支持するものといえる。

各下位尺度間の相関係数

各下位尺度間の相関係数を全体および最多接触時期別に算出した (Table 2)。有意な相関について見てみると、全体の相関では、全ての接触経験の下位尺度は接触時の快感情と正の相関があった ($r = .32 \sim .56$)。同時に、間接触は当惑感情と正の相関があった ($r = .17$)。また、遊びの共有および世話は不快感情と正の相関があった ($r = .22, .17$)。さらに、接触経験の全下位尺度および接触時感情の快感情は、子どもへの関心の全下位尺度と正の相関があった ($r = .14 \sim .69$)。そして、当惑感情および不快感情は寛容性と負の相関があった ($r = -.25, -.34$)。最多接触時期別の相関を見ると、小学校期が最多接触時期の場合、遊びの共有および世話と子どもへの関心の全下位尺度との間に正の相関があった ($r = .17 \sim .43$)。しかし、それ以外の最多接触時期では、有意な相関は見られなかった。また、中学校期が最多接触時期の場合、不快感情と好意的注目、同情、寛容性との間に負の相関があった ($r = -.32 \sim -.33$)。

Table2 各下位尺度間の相関係数

		快感情	当惑感情	不快感情	好意的注目	同情	好奇心	寛容性
遊びの共有	全体	.48 ***	.04	.22 ***	.38 ***	.36 ***	.36 ***	.14 *
	小学校期	.56 ***	.06	.15	.42 ***	.43 ***	.35 ***	.20 *
	中学校期	.44 ***	.04	.10	.19	.21	.21	.04
	高校期	.32 *	.22	.31 *	.24	.15	.31 *	.05
世話	全体	.41 ***	.10	.17 **	.27 ***	.30 ***	.29 ***	.13 *
	小学校期	.53 ***	.19 *	.13	.33 ***	.36 ***	.33 ***	.17 *
	中学校期	.15	-.10	.08	.13	.15	.19	.09
	高校期	.18	.19	.28 *	.02	.11	.10	-.02
間接接触	全体	.45 ***	.17 **	-.02	.37 ***	.34 ***	.42 ***	.14 *
	小学校期	.45 ***	.17 *	.03	.29 ***	.34 ***	.32 ***	.11
	中学校期	.41 **	.04	-.14	.46 ***	.30 *	.53 ***	.13
	高校期	.55 ***	.29 *	.06	.59 ***	.48 ***	.68 ***	.28 *
		快感情	全体	.69 ***	.57 ***	.58 ***	.32 ***	
	小学校期		.65 ***	.58 ***	.55 ***	.35 ***		
	中学校期		.78 ***	.56 ***	.65 ***	.30 *		
	高校期		.73 ***	.55 ***	.57 ***	.24		
		当惑感情	全体	-.03	.07	.10	-.25 ***	
	小学校期		-.06	.03	.09	-.31 ***		
	中学校期		-.07	.12	.09	-.05		
	高校期		.19	.23	.29 *	-.32 *		
		不快感情	全体	-.09	-.01	.09	-.34 ***	
	小学校期		-.11	.01	.09	-.36 ***		
	中学校期		-.32 **	-.32 **	-.14	-.33 **		
	高校期		.05	.22	.24	-.41 **		

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

以上の結果より、接触経験は接触時感情および子どもへの関心と正の相関があることが示された。同時に、接触時のポジティブな感情である快感情は子どもへの関心と正の相関がある一方、ネガティブな感情である当惑感情や不快感情は子どもへの関心と負の相関があることが示された。

重回帰分析の結果

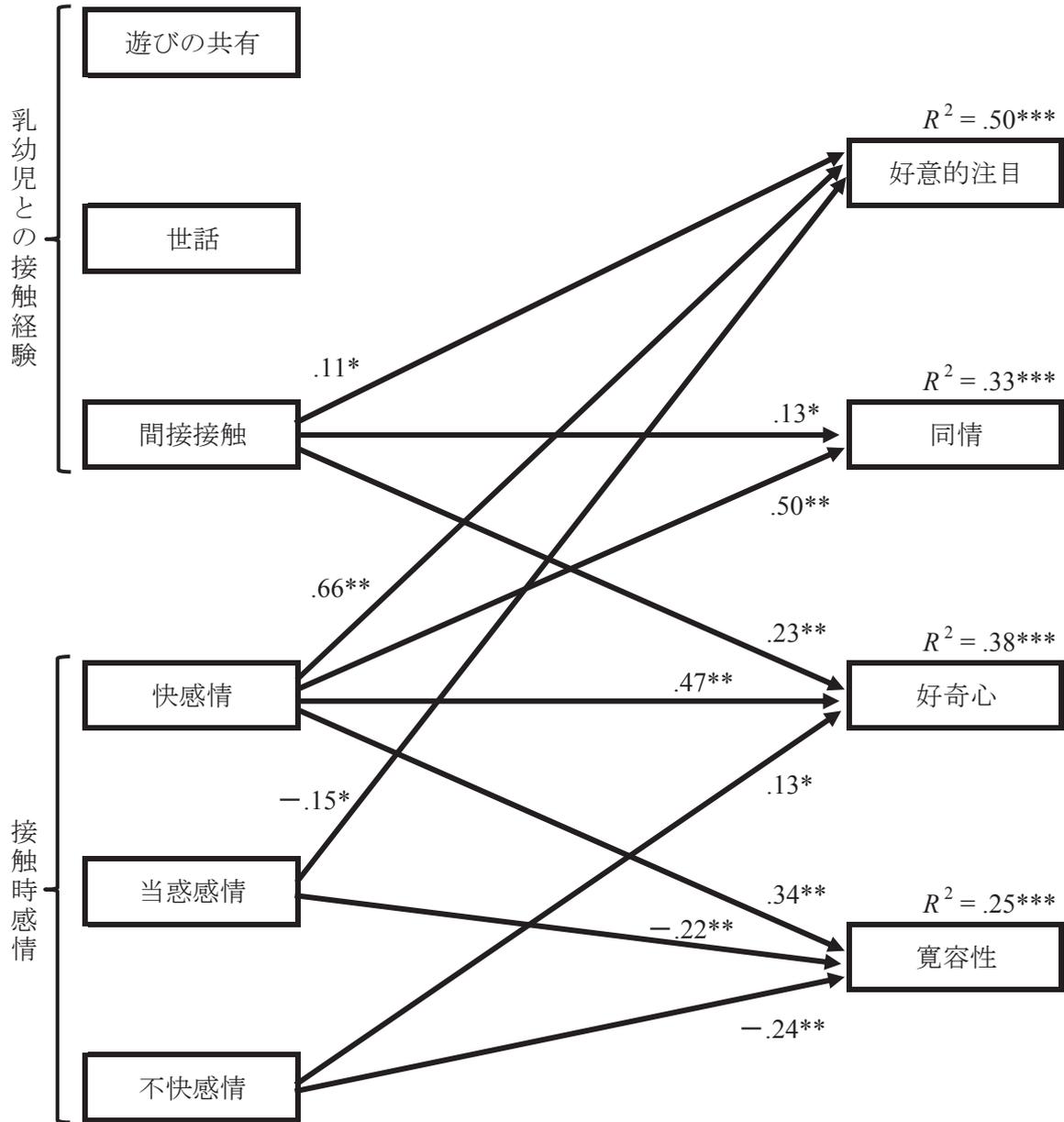
本研究の仮説モデル (Figure 1 のモデル 3) を検討するため、接触経験と接触時感情の各下位尺度を説明変数、子どもへの関心の各下位尺度を目的変数とした重回帰分析 (ステップワイズ法) を行った。VIF はいずれも 3 未満であり、多重共線性はないと判断した。

全体の結果 まず、全体の重回帰分析の結果について述べる (最終的な分析結果を Figure 3 に示す)。各ステップにおける標準偏回帰係数の変化は以下の通りである。好意的注目を目的変数とした分析では、ステップ1で快感情 ($\beta = .69, p < .001$) が投入され ($R^2 = .47, F(1, 262) = 235.01, p < .001$)、ステップ2で快感情 ($\beta = .71, p < .001$)、当惑感情 ($\beta = -.13, p < .01$) が投入され ($R^2 = .49, F(2, 261) = 125.58, p < .001$)、ステップ3で快感情

、当惑感情、間接接触が投入され、分析が終了した ($R^2 = .50, F(3, 260) = 86.69, p < .001$)。同情を目的変数とした分析では、ステップ1で快感情 ($\beta = .56, p < .001$) が投入され ($R^2 = .31, F(1, 263) = 120.24, p < .001$)、ステップ2で快感情、間接接触が投入され、分析が終了した ($R^2 = .33, F(2, 262) = 63.67, p < .001$)。好奇心を目的変数とした分析では、ステップ1で快感情 ($\beta = .57, p < .001$) が投入され ($R^2 = .32, F(1, 264) = 124.35, p < .001$)、ステップ2で快感情 ($\beta = .46, p < .001$)、間接接触 ($\beta = .22, p < .001$) が投入され ($R^2 = .36, F(2, 263) = 73.86, p < .001$)、ステップ3で快感情、間接接触、不快感情が投入され、分析が終了した ($R^2 = .38, F(3, 262) = 52.64, p < .001$)。寛容性を目的変数とした分析では、ステップ1で不快感情 ($\beta = -.35, p < .001$) が投入され ($R^2 = .12, F(1, 263) = 35.47, p < .001$)、ステップ2で不快感情 ($\beta = -.33, p < .001$)、快感情 ($\beta = .30, p < .001$) が投入され ($R^2 = .21, F(2, 262) = 34.66, p < .001$)、ステップ3で不快感情、快感情、当惑感情が投入され、分析が終了した ($R^2 = .25, F(3, 261) = 28.89, p < .001$)。

接触経験の影響では、間接接触は好意的注目、同情、

乳幼児との接触経験と接触時感情が子どもへの関心に及ぼす影響



* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

Figure3 全データを対象とした重回帰分析結果

好奇心に正の影響を与えていた ($\beta = .11 \sim .23$)。よって、乳幼児について見聞きたり学習したりした経験の多さは、子どもを目にした際に注目する程度や子どもへの同情的な関心、好奇心を高めることが示された。一方、直接的な接触経験である遊びの共有と世話は現在の子どもへの関心に影響を与えていなかった。

接触時感情の影響では、快感は子どもへの関心の全下位尺度に正の影響を与えていた ($\beta = .34 \sim .66$)。よって、接触時のポジティブな感情の記憶が強いと、現在

の子どもへの関心が高いことが示された。当惑感情は好意的注目と寛容性に負の影響を与えていた ($\beta = -.15, -.22$)。よって、接触時の戸惑いや緊張の記憶が強いと、子どもを目にした際に注目する程度や、子どもの泣き声や大声への寛容さが低いことが示された。不快感情は好奇心に正の影響を与え ($\beta = .13$)、寛容性に負の影響 ($\beta = -.24$) を与えていた。よって、接触時のネガティブな感情の記憶が強いと、子どもへの寛容さが低い反面、子どもの日常や会話への好奇心が高いことが示された。

不快感情が好奇心を高める理由としては以下の2つが考えられる。第1は、不快感情は乳幼児との接触時に生じる苛立ちや嫌悪感といったネガティブな感情であり、これは乳幼児との相互作用をある程度多く経験しなければ生じない感情だと考えられるためである。乳幼児との接触経験が多くあるからこそ、不快な感情を経験する機会も増える。実際に、Table 2で見たように、遊びの共有および世話は不快感情と正の相関があった。すなわち、不快感情の高さは接触経験の多さを反映している可能性がある。過去の接触経験の多さが子どもへの態度を肯定的にすることは花沢(1992)でも指摘されている。そのため、不快感情の高さが接触経験の多さを反映したことで不快感情の高さが好奇心を高めていたと推測される。

第2は、接触時に不快感情を経験したがゆえに、その経験が子どものことをもっと知りたいという気持ちに結びつく可能性が考えられる。過去の接触時に不快感情を経験した場合、成長してからその時の記憶を振り返った際に、「なぜあの時、自分は不快に感じたのか」などと不快に感じた理由を内省することもあるだろう。菅野(2001)は、母親が育児の中で経験する不快感情を面接法により検討し、不快感情を抱くことが自分の育児を振り返り、内省を深め、子どもとの関わり方を修正することに寄与すると指摘している。本研究の接触対象は自分の子ではないが、先行研究の指摘と同様に、接触時の不快感情も肯定的に作用する可能性を示すものといえる。過去の接触時の不快感情もまた、その経験を回想する中で子どもへの好奇心を高める要因になるのである。

ただし、接触経験と接触時感情を子どもへの関心の説明変数として互いに統制した場合、接触経験から子どもへの関心に伸びるパスの本数は接触時感情と比較して少なかった。また、標準偏回帰係数も接触時感情の方が全体的に高かった。このことから、接触経験より接触時感情の方が子どもへの関心に与える影響は大きい可能性が示された。さらに特筆すべき点として、遊びの共有や世話といった直接的な接触経験は子どもへの関心に影響していなかった。先行研究では、直接的な接触経験が子どもへの態度を肯定的なものにするとされてきた(安積, 2008; 花沢, 1992)。しかし本研究では、遊びの共有と世話の影響は見られなかった。この理由としては、直接

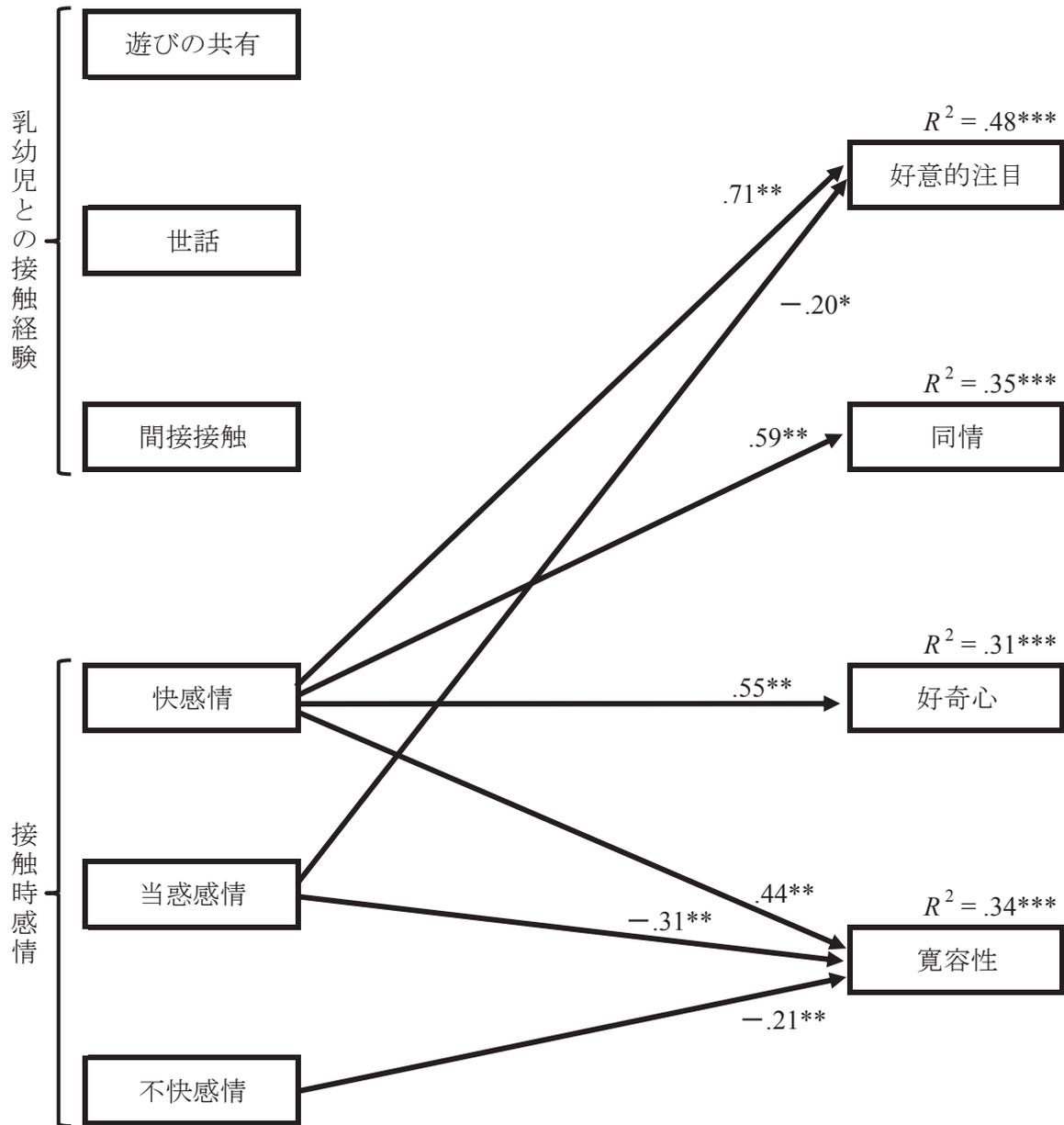
的な接触時には楽しい、不快といった何らかの感情が接触と同時に生じることが多いためと考えられる。つまり、接触経験と感情が同時に経験された場合、接触したという事実の記憶よりも、接触した際の感情の方が記憶に残りやすく、接触経験の効果が接触時感情の効果に吸収されたと推測される。

以上のように本研究では、接触経験よりも接触時感情の方が子どもへの関心に及ぼす影響は大きいという結果が得られた。これは多くの先行研究において指摘されてきた直接的な接触経験と子どもへの態度との間には関連があるという結果は、感情が第3の変数として機能していたことによる疑似相関であった可能性を示すものである。また同時に、過去に乳幼児と接触した頻度や量よりも、どのような感情を抱き、記憶しているかという質的な側面の方が後の子どもへの態度に及ぼす影響が大きいことを示唆するものである。

一方、間接接触は後述の最多接触時期別の結果でも見るように、子どもへの関心の一部に影響を与えていた。間接接触は、乳幼児について見聞きしたり学んだりするといった知識を得る経験であり、直接的な接触と比べると感情が伴いにくいと考えられる。そのため、間接接触した事実のみが記憶に残りやすく、そのみでも子どもへの関心を高める効果が見られたといえる。

最多接触時期別の結果 続いて、最多接触時期別の重回帰分析の結果について述べる(最終的な分析結果をFigure 4~6に示す)。各ステップにおける標準偏回帰係数の変化は以下の通りである。小学校期の分析では、好意的注目を目的変数とした分析においては、ステップ1で快感情($\beta = .67, p < .001$)が投入され($R^2 = .44, F(1, 150) = 119.70, p < .001$)、ステップ2で快感情、当惑感情が投入され、分析が終了した($R^2 = .48, F(2, 149) = 69.40, p < .001$)。同情を目的変数とした分析では、ステップ1で快感情が投入され、分析が終了した($R^2 = .35, F(1, 149) = 79.33, p < .001$)。好奇心を目的変数とした分析では、ステップ1で快感情が投入され、分析が終了した($R^2 = .31, F(1, 150) = 66.59, p < .001$)。寛容性を目的変数とした分析では、ステップ1で快感情($\beta = .38, p < .001$)が投入され($R^2 = .15, F(1, 149) = 25.38, p < .001$)、ステップ2で快感情($\beta = .47, p < .001$)、当惑感情($\beta = -.41, p < .001$)が投入され($R^2 = .30, F(2,$

乳幼児との接触経験と接触時感情が子どもへの関心に及ぼす影響



** $p < .01$, *** $p < .001$

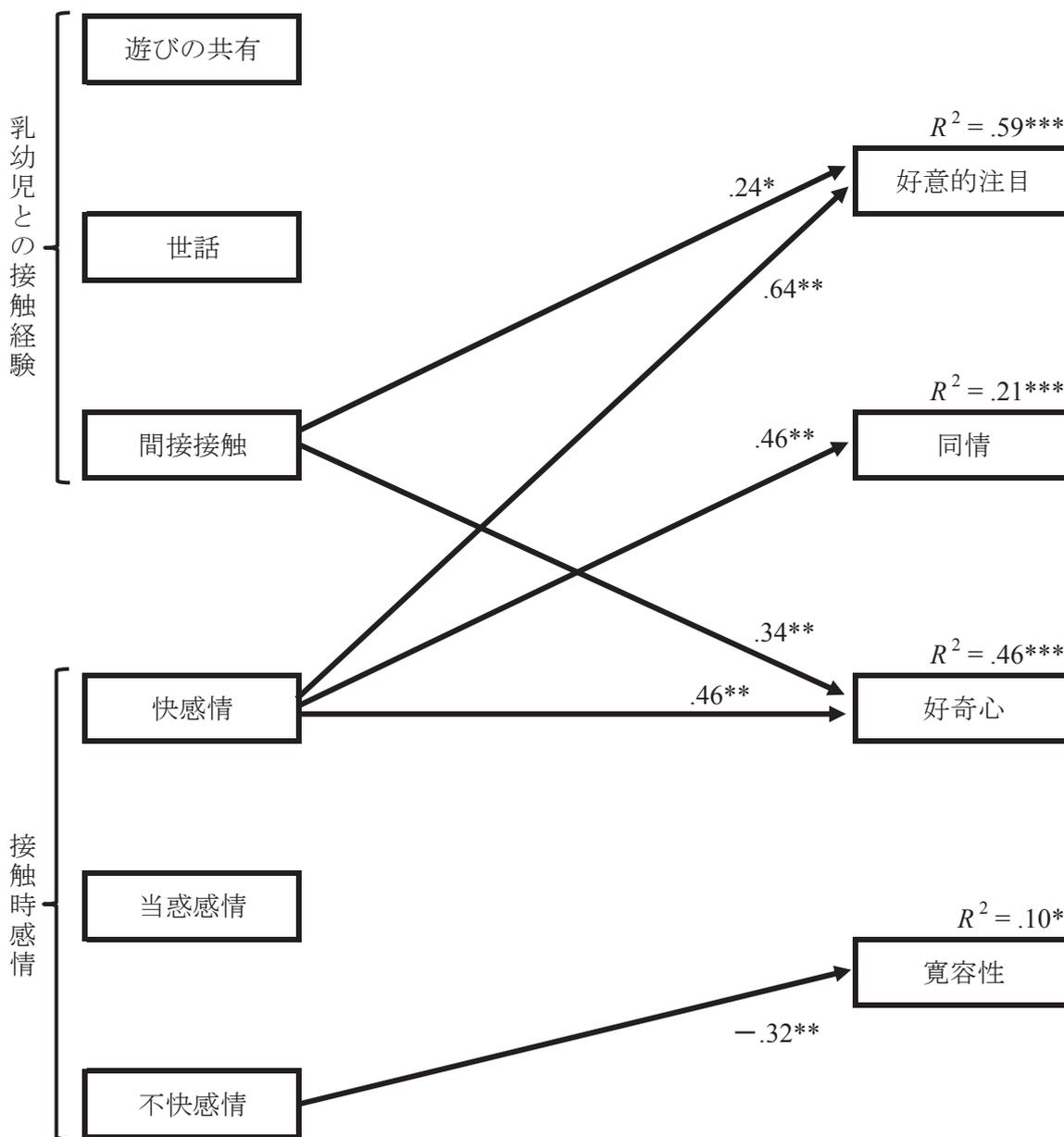
Figure 4 小学校期が最多接触時期の場合の重回帰分析結果

148) = 31.96, $p < .001$), ステップ3で快感情, 当惑感情, 不快感情が投入され, 分析が終了した ($R^2 = .34$, $F(3, 147) = 24.93$, $p < .001$).

中学校期の分析においては, 好意的注目を目的変数とした分析では, ステップ1で快感情 ($\beta = .74$, $p < .001$) が投入され ($R^2 = .54$, $F(1, 59) = 69.79$, $p < .001$), ステップ2で快感情, 間接接触が投入され, 分析が終了した ($R^2 = .59$, $F(2, 58) = 41.30$, $p < .001$). 同情を目的変数とした分析では, ステップ1で快感情が投入され, 分析が

終了した ($R^2 = .21$, $F(1, 60) = 16.14$, $p < .001$). 好奇心を目的変数とした分析では, ステップ1で快感情 ($\beta = .60$, $p < .001$) が投入され ($R^2 = .36$, $F(1, 60) = 34.16$, $p < .001$), ステップ2で快感情, 間接接触が投入され, 分析が終了した ($R^2 = .46$, $F(2, 59) = 24.65$, $p < .001$). 寛容性を目的変数とした分析では, ステップ1で不快感情が投入され, 分析が終了した ($R^2 = .10$, $F(1, 60) = 6.94$, $p < .05$).

高校期の分析においては, 好意的注目を目的変数とし



* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

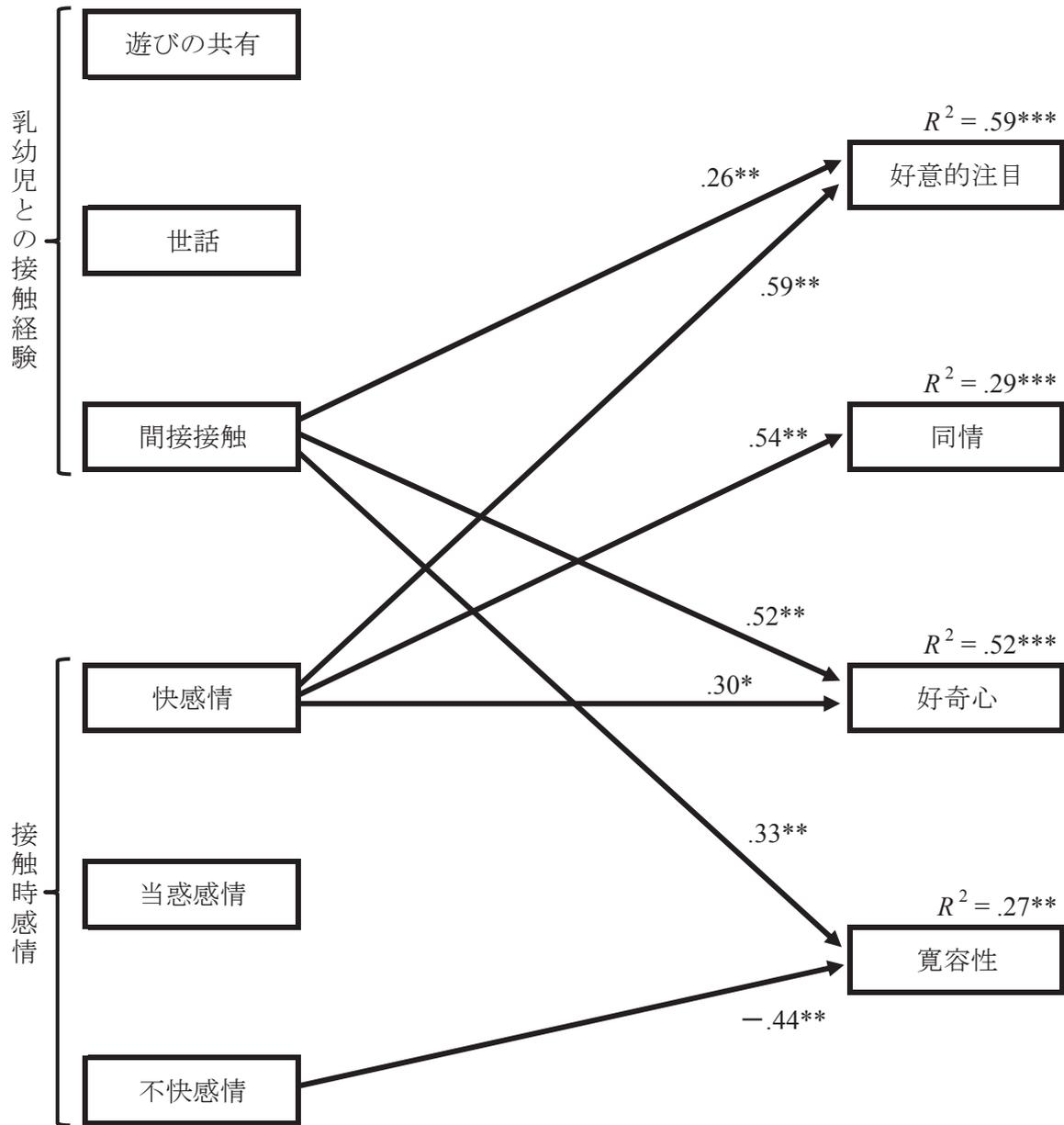
Figure 5 中学校期が最多接触時期の場合の重回帰分析結果

た分析では、ステップ1で快感情 ($\beta = .73, p < .001$) が投入され ($R^2 = .54, F(1, 47) = 54.20, p < .001$), ステップ2で快感情, 間接接触が投入され, 分析が終了した ($R^2 = .59, F(2, 46) = 32.42, p < .001$)。同情を目的変数とした分析では、ステップ1で快感情が投入され, 分析が終了した ($R^2 = .29, F(1, 48) = 19.86, p < .001$)。好奇心を目的変数とした分析では、ステップ1で間接接触 ($\beta = .68, p < .001$) が投入され ($R^2 = .56, F(1, 48) = 40.80, p < .001$), ステップ2で間接接触, 快感情が投入され,

分析が終了した ($R^2 = .52, F(2, 47) = 25.75, p < .001$)。寛容性を目的変数とした分析では、ステップ1で不快感情 ($\beta = -.40, p < .01$) が投入され ($R^2 = .16, F(1, 48) = 9.22, p < .01$), ステップ2で不快感情, 間接接触が投入され, 分析が終了した ($R^2 = .27, F(2, 47) = 8.56, p < .01$)。

接触経験の影響では、小学校期では影響は見られなかったが、中学校期と高校期では、間接接触の影響が見られた。具体的には、中学校期では好意的注目と好奇心

乳幼児との接触経験と接触時感情が子どもへの関心に及ぼす影響



* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

Figure6 高校期が最多接触時期の場合の重回帰分析結果

のみに正の影響を与えていたが、高校期ではその2つに加えて寛容性にも正の影響を与えていた ($\beta = .24 \sim .52$)。

接触時感情の影響では、年齢段階にかかわらず、快感情が子どもへの関心の一部または全部に正の影響を与えていた ($\beta = .30 \sim .71$)、不快感情は寛容性に負の影響を与えていた ($\beta = -.21 \sim -.44$)。また小学校期では、当惑感情が好意的注目と寛容性に負の影響を与えていた ($\beta = -.20, -.31$) が、中学校期と高校期では、当惑感情の影響は見られなかった。このように、中学校期、高校期と比較し

て小学校期が最多接触時期であった者の方が、接触時感情の各下位尺度から子どもへの関心の各下位尺度への影響が多様であり、年齢段階が低いほど接触時感情が子どもへの関心に対して多様な影響を及ぼすことが示された。

小学校期において接触経験の影響が見られず、接触時感情の影響が強いという結果は、小学校期が最多接触時期であった者は、それ以外が最多接触時期であった者より接触経験が多いという結果 (Table 1 参照) に起因し

ているといえる。上述のように、乳幼児との接触が多いほど、そこで経験される感情の種類と程度も多くなり、接触経験そのものより接触時感情の方が記憶に残りやすくなるため、相対的に接触時感情の影響力が強まったといえる。

ただし特筆すべき点として、中学校期と高校期では、直接的な接触経験である遊びの共有と世話の影響は見られず、間接接触の影響が見られた点が挙げられる。これを学校教育の観点から見ると、中学校・高校において、乳幼児について学ぶ、調べる、見聞きするといった内容を授業に取り入れることは、後の子どもへの関心を高めることに寄与する可能性があることを示している。一方、直接的な接触経験は子どもへの関心に影響を及ぼしていなかった。平成20年度の学習指導要領の改訂において、中学校では子どもと直接ふれあう体験学習が原則として必修化され、高校でも学校ごとの判断で導入できる選択必修となった(文部科学省, 2008, 2009)。しかし本研究の結果からは、直接的な接触経験のみでは子どもへの関心を高める効果は見られなかった。

その一方、中学、高校期においても接触時の快感情が子どもへの関心を高め、不快感情が寛容性を低める効果は見られた。従って、ふれあい体験学習の実施時には、教師や学習を受け入れる施設の保育者等は生徒がポジティブな感情をできるだけ多く経験できるように配慮する必要がある。ネガティブな感情を抱くことがあっても、そうした気持ちをポジティブな感情として記憶できるように学習の現場や事後学習において指導・支援していくことが重要である。また、学校教育に限らずとも、特に中学・高校生が乳幼児と接触する際には、周囲の年長者はそれがポジティブな経験として記憶に残るように支援し、適切な助言や励ましを与えることが大切である。接触時のポジティブな感情の記憶が、将来の子どもへの関心を高める要因になるのである。

本研究の限界と今後の課題

本研究では、大学生を対象に過去の乳幼児との接触経験と接触時感情の影響について検討したため、回想法を用いて過去の接触経験の頻度や感情について評定を求めた。そのため、経験が過去のものであるほど、記憶が不明確であったり、忘却や変容が生じたりする可能性がある。加えて、回想法では現在の自己の状態に基づいて評

定がなされるため、特に接触時感情については記憶の変容の影響を受けやすいと思われる。例えば、過去の主たる接触対象が弟妹であった場合、現在の弟妹との関係性からの影響を受けることもあるだろう。従って今後は、乳幼児と接触した直後に接触の程度を測定する尺度や接触時感情尺度への評定を求め、期間を空けて子どもへの態度を評価するといった縦断的かつ介入的な方法が必要となる。

付 記

本論文は扇原・首藤(2016)に追加調査を実施し、先のデータと合わせて改めて分析を行い、新たな知見を得たものである。本論文の執筆に際して、首藤敏元先生(埼玉大学)から多くのご指導を賜った。また、調査に際しては多くの先生方や学生の皆様のご協力を頂いた。記して感謝申し上げます。本研究の一部は31st International Congress of Psychology (2016)において発表された。

引用文献

- 安積 陽子 (2007). 看護系・福祉系大学生の養護性の形成に関する一考察——性別と乳幼児接触体験との関連から—— 甲南女子大学研究紀要看護学・リハビリテーション学編創刊号, 1, 23-28.
- Brosh, T., Sander, D., & Scherer, A.R. (2007). That baby caught my eye... Attention capture by infant faces. *Emotion*, 7, 685-689.
- Fullard, W., & Reiling, A.M. (1976). An Investigation of Lorenz's "Babyness". *Child Development*, 47, 1191-1193.
- 花沢 成一 (1992). 母性心理学 医学書院
- 伊藤 葉子 (2004). 中・高校生の保育体験学習の教育的効果 乳幼児教育学研究, 13, 1-12.
- 小嶋 秀夫 (1989). 養護性の発達とその意味 小嶋 秀夫(編) 乳幼児の社会的世界 (pp.187-207) 有斐閣
- 小嶋 秀夫 (2001). 心の育ちと文化 有斐閣
- 厚生労働省 (2015). 平成26年人口動態調査 厚生労働省 Retrieved from http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/GL71050103.do;jsessionid=31rLXvhH2DgvSrBJ0rGKsGS0pXhynqVwj2DfBhx56kY7ZBvq0t9d!-1367848011!1512348938?_toGL71050103_&listID=0

乳幼児との接触経験と接触時感情が子どもへの関心に及ぼす影響

- 00001137964&forwardFrom=GL71050101 (2017年1月13日)
- Lorenz, K.Z. (1943). Die angeborenen Formen möglicher Erfahrung. *Zeitschrift für Tierpsychologie*, 5, 235-409.
- McArthur, L. & Berry, D. S. (1987). Cross-cultural agreement in perceptions of babyfaced adults. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 18, 165-192.
- 文部科学省 (2008). 中学校学習指導要領
- 文部科学省 (2009). 高等学校学習指導要領
- 中嶋 明子・砂上 史子・日景 弥生・盛 玲子(2004). 高校家庭科における保育体験学習者の意識変容 (第1報) ——保育体験学習の意識変容過程の構造化—— 日本家庭科教育学会誌, 46, 351-361.
- 中西 雪夫・牧野 カッコ (1989). 高校生の「親になることへの準備状態」と保育教育 (第2報) ——「準備状態」の形成に影響を与える要因—— 日本家庭科教育学会誌, 32, 55-59.
- 岡田 恵子 (2010). 医療保育科学生の入学から卒業までの各実習における子ども観の変化 川崎医療短期大学紀要, 30, 69-75.
- 扇原 貴志・村井 潤一郎 (2012). 大学生の子どもへの関心とその関連要因 子育て研究, 2, 3-12.
- 扇原 貴志・首藤 敏元 (2016). 大学生における過去の乳幼児との接触経験とそれに抱いた感情 埼玉大学紀要・教育学部, 65, 1-14.
- 菅野 幸恵 (2001). 母親が子どもをイヤになること: 育児における不快感情とそれに対する説明づけ 発達心理学研究, 12, 12-23.

Interest in young children: The influences of contact with infants and its related feelings

Takashi Ougihara*

The influences of experiencing contact with infants in the past and related feelings on current interest in young children were investigated. A questionnaire survey was conducted with university students ($n = 355$). The results of multiple regression analysis indicated that a high frequency of past indirect contact with infants was related to increased current interest in young children. Moreover, vivid memories of pleasant feelings during the experience were also related to increased interest in young children, whereas memories of negative feelings such as embarrassment and unpleasantness partly increased and partly decreased interest in young children. Consequently, it was confirmed that feelings experienced when contacting with infants in the past affected present interest in young children. On the other hand, the frequency of direct contact with infants in the past did not affect current interest in young children. Previous studies have indicated people who had more experiences of contact with infants become to have affirmative attitudes towards young children. This might be a spurious correlation resulting from feelings at the experience

functioning as a third variable. Simultaneously, it might be possible that interest in young children is more strongly affected by feelings during the experience than by experience of contact with infants. Furthermore, participants' age when contacting with infants was taken into consideration in the analysis. The results indicated that not only feelings during the experience, but also the frequency of indirect contact with infants increased interest in young children, as the age when participants had the experience increased.

Key words

Experience of having contact with infants, Feelings when having contact with infants, Interest in infants, University students, Questionnaire method

*The United Graduate School of Education, Tokyo Gakugei University

乳幼児との接触経験と接触時感情が 子どもへの関心に及ぼす影響

扇 原 貴 志*

本研究の目的は、過去における乳幼児との接触経験と接触時に抱いた感情が、現在の子どもへの関心に及ぼす影響を検討することであった。大学生355名を対象に質問紙調査を実施した。重回帰分析の結果、過去に乳幼児との間接的な接触経験を有した頻度が高いと、現在の子どもへの関心が高かった。また、接触時に快感情を抱いた記憶が強いと、子どもへの関心が高かった。接触時の戸惑いや不快感といったネガティブな感情の記憶の強さは、子どもへの関心の一部を高め、一部を低めていた。よって、過去の乳幼児との接触時感情が、現在の子どもへの関心に影響を及ぼしていることが確認された。一方、過去の乳幼児との直接的な接触経験の頻度は、現在の子どもへの関心に影響を与えていなかった。したがって、乳幼児との接触経験が多いほど子どもへの態度が肯定的になるという先行研究の結果は、接触時感情が第3の変数として機能したことによる疑似相関である可能性

が示された。同時に、乳幼児との接触経験よりも接触時感情の方が、子どもへの関心に与える影響が大きい可能性が示された。調査参加者が乳幼児と接触した際の年齢を考慮した分析を行った結果、接触時の年齢段階が高いほど、接触時感情だけでなく間接的な接触経験の頻度も子どもへの関心を高めることが分かった。

Key words

乳幼児との接触経験, 乳幼児との接触時感情, 子どもへの関心, 大学生, 質問紙法,

*東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科